

# 日食なつこ

## 特別インタビュー

藝祭 2025 ステージ課 野外ステージライブのゲスト、日食なつこに迫る  
特別なインタビュー

日食なつこの世界観や哲学から藝祭への思いまで、多岐にわたる話を伺った

——まずは、藝祭 2025 特別ステージのご出演を依頼されたときの心情をお聞かせください。

藝大さんは知り合いが何人かいて、卒業生の方も、仕事で色々お世話になっている方もいるので、日本の芸術関連の最高学府というところからこうやってお声がけいただけるのはすごい光栄だなんて思っていて、一も二もなくぜひお願いしますという風な感じでした。

## 楽曲作成秘話を探る

——次に楽曲制作についてもお伺いしたいと思うのですが、「書いたけれども難しく放置している曲が多くある」と他のインタビューで拝見したのですが、曲作りはまずイメージが浮かんでからそれを形にしていくというスタイルなのでしょうか。

曲によって全然違いますね。

言いたいことがすごく強くある、まず一文この台詞をとにかく言いたいんですというところから肉付けしていく曲もありますし、いい風景を目にしている、例えば今日も午前中とか車で色々運転して回ったんですけど、その時に見える夏景色とか。季節によりけり、場所によりけりでいい景色があるなって思うとやっぱり自分の言語と使える音で形にしたいというような欲が湧いてくるんです。そういう視覚的なところから（作り）始める曲とかもあります。

人の話を聞いて、「この人の感情って今こんな感じなんだろうな」という想像から書き始める曲もありますし、本当にものによって全く違います。

——拝聴している中でも恐らくご自身の生活の中から出てきた「HIKKOSHI」や「KANENNGOMI」のような解像度の高い曲もあれば、先ほどおっしゃっていたような一つメッセージを置きたいという曲があるなどというのはなんとなく想像はしていたのですが、他の人の気持ちに寄り添うというか、その人の気持ちを想像したり自分の中で汲み直すというプロセスで曲を書くこともあるということですか？

そうですね。それが結構名曲になることが多いなというか。

——差し支えがなければこの曲がこう、とかお伺いしてもよろしいでしょうか。

一番古い曲の「ヒューマン」という曲は具体的なエピソードがあって。その時まだ私は地元の岩手に住みながら活動していた頃だったんですけど、ライブも上手で、この人絶対音楽業界に出ていくんだろうなって思っていたミュージシャンの先輩が、ある日ボソッとブログで「僕は人間に生まれたことを悔やみました」という風な記事を書いてたことがあって。「ルックスもいいし、音楽的にも優れているし。こんなに色んなものを持っている人でさえ人に生まれることを悔やむってどういうことなんだろう？」っていうところから色々想像して。その人に対する「なんでそんなこと考えるんだろう？」とか、「あなたこれだけのこと持ってるじゃない」とか。色んな言いたい言葉がまとまってできたのがヒューマンっていう曲だったりとかっていうのはあります。

なのでその人の気持ちを想像してっていうよりかは、もしかするとその人に対しての返信、リプライとしてそういう曲を書くことがある、というのは結構あるかなと思います

——何か批評のような形で、曲を書くことでそれを実践していくというようなタイプなのでしょうか。

そんな感じだと思いますね。

——日記をつけていたらしゃると他のインタビューで読んだのですが、その日記もインスピレーションの源になったりもするのでしょうか。

すごくなってると思いますね。本当に日記は小学校一年生から不定期ですけどずっと続けて書いてるので。本当に不定期で、全然今は書いてもいないですけど。それでも SNS とかで限られた文字数の中ではなくて、誰にも見られないところでこそ自分の言葉をちゃんと自分で対峙してみて、まとまってなくても、長文何ページでもいいから書いていくことによって、自分が置かれている状況を言語化してはつきりさせる。自分がどういう感情に悩まされているのかをちゃんと言語化。「なんとなくぼんやりこんな気持ちだな」じゃなくて、「こういうことがあって、こういう気持ちを今自分は感じている」というのをちゃんと文字にして見えるようにしていくことによって、より自分の感情とか言いたいことに敏感になれるってというのは「基礎練」というか、「筋トレ」みたいな感じで。昔からあったのかなとは思いますが。

——言葉の練習なんですね。

そうですね。完全に個人練習って感じです。

——だからこそあんなに胸に迫るような歌詞が沢山生み出されているんだなと思いました。

では、なぜ他の表現方法ではなく（主に）ピアノと歌を選ばれたのか。日食なつこ様にとってピアノとはなにかをお伺いできればと思います。

ピアノを選んだ理由としては、小学校一年生の時にエレクトーンを習い始めたんですけども、グループレッスンで3人くらい教室と一緒にいて、色んな曲をやるってところがスタートだったんですけど。それも親から普通に勧められて。「あんたやってみたら？」って言うので行っただけで、そんなに自主性はなく。そこのエレクトーンの先生が、「この子はグループレッスンのエレクトーンじゃなくて個人レッスンのピアノの方が合ってそうだ」と判断したらしく、その時はまだ私は全然わかっていなかったんで

すけど。ということで、ピアノの方に転向して、自分の唯一使える楽器をそこで手に入れた。そんな延長線上って感じですかね。

大学に入ったらバンドをやりたいとずっと思っていたんですよ。元々バンドがすごい好きだったし、ライブハウスとかも好きです。こんなことを言うと語弊があるかもしれないですけど、やっぱりピアノ弾き語りって優しくて、穏やかで、全然私っぽくない。

もっと自分としての姿って多分バンドとかライブハウスにあるはずだ、っていうところで。本当は大学に入ってギターとかベースとか、ドラムはちょっと難しそうだけどなんでもいからやってみたって思ってたんですが、社交力の問題とか、実は入学してすぐ通わなくなったので、バンドする機会も逃してしまって。ピアノを選んだというよりも、ピアノ以外なかったということで、今までの延長線で続いているって感じですね。なので、ピアノっていう楽器が自分にとってどういうものかと聞かれると、「監視者」って感じですかね。監視してる人、「管理人」。友達とか仲間みたいな感じでは全然思っていてなくて、本当に厳しい目で自分のことを見てくる楽器って感じですかね。

——相棒というよりは、ピアノと向き合っている間は自分の現在地をずっと見られているような。

そんな感じですね。ピアノって弾く人によって全く違う音が出るので、クラシックピアノ専門でやってこなかった人間としても、それこそ藝大の音楽科さんとか、そういう人とどうしても比べると、それはそのままピアノの目線。「あなたはどうせこの程度でしょ」っていう風に常にピアノに言われているんだろうなっていう感覚はあるなと思います。

——最新のアルバムの中に収録されている「閃光弾とハレーション」をスタジオライブ配信で演奏されている姿を見て、1人で立っているフロントマンというイメージのままだと感じましたが、そのようなバンドの中に1人で立つというのが自分らしいなと思ってらっしゃったんですね。

そうですね、ピアノが適していると思っていたら最初からクラシックピアノに流れていたと思うので、自分のやりたいこと、本当の性格はライブハウスのステージの上にあったなと。

——ピアノと歌を続けていらっしゃいますが、歌の弾き語りのスタイルでいることの、ご自身のこだわりはあるのでしょうか。

もともとやりたかった仕事も広告のキャッチコピーや新聞記者で、音を作ることと同じくらい文章やキャッチフレーズ、人が「お？」と立ち止まり足を止めてくれるようなキーワードを自分で作り出すことに興味があったので、合わせ技として弾き語りになったと思いますね。

——カッコいいです。ピアノを「監視者」のように捉えている部分に通じ合うところを感じました。

学生さんだと、まだまだ余白やこれからやっていくべきことがすごく多いと思うので、より一層楽器や絵筆が『そう言っている』のような感覚を持っている方もいるかもしれませんね。

# 他者（ファンや他のアーティストの方など）と 日食なつこの関係性とは

——日食さまは自身の音楽に宿る意味を聴き手に見出してもらおうという姿勢があるなど、常に聴き手に寄り添っていらっしゃるのが特徴的だと思われませんが、一方で、自身の音楽をこういう風に聴いて欲しい、自身の音楽で人々にこうなってほしいというような個人的な願いなどはあるのでしょうか？

今は自分が正解だと思っているもののみを作っているという感覚ですね。一昔前までは、「お客さんのために」「誰かの力になれば」というような客席へ降りて曲を書こうとしたこともあったのですが。そうすると繕った言葉しか出てこない、10年前に誰かが歌っていたようなワードしか出てこない、面白くない。私は多分、人に向けてどうのこうのではなく、自分がどうかというところで判断して生きていかないといけないということに気付いてからは、客席を一切見ずに曲を書くようになりました。そうすると、結果的に嘘っぽくないと判断され、お客さんがついてきてくれるようになりましたね。

——過去に「歌詞に出会ってお客さんが感動するのは、その人がそれまでに歩んできたものがそうさせているのだ」と内容の発言をされていて、自分（インタビュアー）が日食さんの楽曲を受け取っている構造を、見抜かれているんだと。ご自身の思うことを言葉にしていく中で、嘘がなくてクオリティが担保されていれば、誰かがついてきてくれるはずだ、という信頼のようなものをお持ちなのでしょうか。

そうですね、信頼っていうのはあると思いますね。暗黙の信頼関係というか、「たくさんのお客さんが欲しい」って思うと、大勢になるべく母数が多くなるような平たい言葉を選ばなくちゃならないんですけど、そうすると結局濃度の薄いお客さん、私じゃない言葉でも刺さるような方が、とりあえず今は日食なつこの座席行っとくか、みたいなお客さんが増えるんじゃないかなと。それでも全然いいですが、どうせだったら私しか選んでない言葉で、私しか選べないお客さん、という人に見て欲しいな、と常に思ってますし、お客さんもそういうのを求めてこういう規模になっている気がします。暗黙の信頼関係。私はかならずちゃんと、正しいかどうかはわかりませんが、迷ったときに判断材料になるような言葉は吐けると思うので、お客さん方にはそれを、少なくとも何か参考材料にしてほしい、というような感じでやっています。

——自分がやりたいように活動している、というような気持ちも持ちつつ、？

そうですね、私自身もすごく迷うところで、結局私って何のために活動してるんだろう、とは常に思いますね。そこはこの藝祭に限らず、いつまでも答えは出ないところなんだろうなってのは思っていて、お客さんにも「日食なつこって結局誰のために、何のために歌ってるんだろう」とこの先10年、20年も見て、楽しんでもらえたら一番いいのかな、と思っています。

——カッコいい。でもそういった、シビアというか、直視してしまったら自分の中の何かが崩れてしまいそうなものに、アクチュアルに真正面から捉えて目を逸らさないっていうのが、楽曲からも、今お話ししてる時間からもすごく感じます。

この年になると、っていうのもあると思います。学生さんのうちだと、学校の先生や親から「あんたこれ違うんじゃないの。」とか「こっちに修正した方がいいんじゃない？」と言ってくれるんですけど、34歳になると、スタッフチームも年下の人が増えていって、戒めてくれる人もいなくなってきて。自分の周りでも、「ああこの人は40、50歳になっても自分のことを戒めてきたから、こうやって真っ直ぐ立っているんだな」というような人もいれば、「どっかでミスったんだろうな」って思う人も正直います。どこまでいっても反面教師というか、「この人っぽくなりたくないな。」と思ったらその人っぽくしない。そうやって自分のことにするし、人に怒られたら先にまずごめんなさいっていうし。アーティストとしてじゃなくて社会人としてやってる。

——社会人と芸術家という言葉結びつけたがらない層もこの大学にはいると思いますし、他にもそういう考えは沢山あると思うんですが、日食なつこさんの活動からすると、「ビジネス」を切り離さないとお見受けしているし、「一般常識」から離れるために芸術をしないな、と感じていて。たとえばそういうことを、社会常識、人と関係を築いていくことを諦めちゃいけないと思った時期や経験はありますか？

逆に私は、芸術とか表現に針を全振りして、それ以外の社会性とか人間性、社交性を全部捨ててきたひとを、最初のうちはもう全否定だったんですよ。「なんなのこの人は？」って。「音楽さえできれば何してもいいと思ってんの？」とか、「表現さえ良ければ何でもいいんですか？」っていうのが一番最初でした。ただ、ここまで活動을続けてきて出会ってきた何百人、何千人もの何かを表現している人たちのその後を見ていると、全振りした人は全振りした人なりのところ辿り着くのだなと。社会人として本当に終わっているけれど、それを全部表現で賄うという、その人なりの覚悟がある。若い時には見えなかったその人のゴールなのだと思います、最近逆はそのような人のことを理解しないとかなんか思っています。でも、藝大にいらっしゃる皆さんと同じくらいの年齢の時は、本当に許せなかったですね（笑）

——そうだったんですか！

はい、その姿勢が良かったんだろうと。

——周りを見ていると、若いうちから全振りしている態度の学生もいますので、その大学の学生に対して日食さんが演奏されるのが、意味があると勝手に感じておりました。

私も楽しみです。若い時の強さって、失うものがないことだと思っていて。例えば芸術や表現に全振りし、「他は何もいらぬぜ」と言っている人が、私みたいな一応全部80%くらいでちゃんと賄おうとしている人間を見て、強烈な嫌悪感を抱き「俺はお前のようにはない」って言うような可能性も十分にあるなと私は思っています。逆にそれが楽しみだなと。それが30、40代になると言えないし、言ったとしても相手にされないと思う、きっと。そういう「他者を攻撃・否定できるほどの強烈な個性」というのはやはり20代くらいが一番光るなと私は思っているので、そういう意味も含めて藝祭のオファーを受けたというのは自分の中であります。どんな反応が来たとしても、ぜひ受け取りたい。

# 2025 年現在の日食なつこに迫る

——今後音楽を共に作り上げてみたい楽器や、曲の形式など、将来の設計についてお伺いしたいです。

現時点でバンドや弦楽、パーカッションなど、様々な編成で色々な方とやれているので、これ以上風呂敷広げると散らかりすぎるなというのもあるので、今は関わってくれている方々との絆の現状維持を大事にしつつ、自分の技術向上も図っていきたいと思っています。

——そうなんですな。

ピアノに関しては素人に毛が生えた程度なので。

——いやいやいや。

最近、クラシックピアノを家で弾いてますね。今、大きなライブハウスを巡る Zepp 規模の大きなライブハウスを巡る「玉兎“GYOKU-TO”」というライブツアーをやっているのですが、バンドの中っているとバンドに埋もれないように、強く弾かなくてはならず、ピアノ本来の柔らかさやアナログの音の美しさから遠ざかるように思っていて。Zepp ツアーが終わった後は、チームとしてではなく、ピアノ弾きの個人として、技術と向き合いたい、という準備として、今はクラシックピアノを強めに弾いています。

——コロナ中に配信されていた、キーボードと日食さん本人の歌だけで演奏をしている無観客ライブの映像から、歌と全く矛盾しない鍵盤の演奏からフィジカルの強度をすごく感じ、感激した記憶があります。それでもなお、クラシックピアノを練習されている姿に、尊敬という言葉では言い表せないです。

ありがとうございます。ピアノと歌だけで成立しなくてはいけない、というのは昔からありますね。ピアノの伴奏は卒業式の合唱の伴奏のような、悪く言ってしまうと退屈な伴奏が多いと思っていて、それを打ち崩す文化がどこかで生まれてほしいと思っていて。ずっと変な伴奏をしたかったんです。それはもう完全に若気の至りですけど。音楽的というより、大道芸的に見られた時に「あいつなんかやばいことやってる」で気を引きたい、というような気持ちでこのスタイルを始めたので、本当に最初は音楽性はなかったから、今クラシックピアノとかを改めて弾いて育てていきたい、みたいなところはありますね。

——打楽器的なピアノが裏にいるなど感じる楽曲も多くありますが、それはこのような意図があったのですね。

「ログマロープ」のイントロなどは特にピアノで弾いているイメージはなく、まさにギターのリフですね。

——その自覚もある中で、あえてそれをやってやろうという。

そうですそうです。なんならこれを聞いて、バンドマンがギターやベースでカバーするイメージもあって。

——日食さんの独特なピアノスタイルは、こういった反骨精神から作り上げられたものだったんですね。「新しい環境に飛び込むのが得意ではない」と答えられていた昔のインタビュー記事を拝読したのですが、昔と今で変わった部分などがあればお伺いしたいです。

新しい環境は確かに苦手だなんて思いますね。チームでツアーの話をしたり、次のアルバムの話をする時に、自分の中には全くない引き出しを、いきなり「こんなものあるけど」って見せられるとまず警戒から入ってしまう癖は、昔からあると思います。ただ、その警戒心のおかげで、20代の頃は自分の好きな世界だけを掘って、個性っていうのをまず確立してから、30代でようやく人の引き出しを覗く余裕が出てきたというようなところはあるので、表現者としての個性を先に確立する作業が、その警戒心のおかげでできたというようには思います。

——20代のうちは他者を攻撃してしまうほどの個性っていうものを保持したままでいられるけれど、30代、40代になるとそうはいかない、という自覚が強くなるようにお話を伺う中で思っていて。例えば、他の人との関わりっていう中でも、最近になって周りのものを認められるようになったのは、年齢も関係しているとお考えですか？

いや、性格だと思います。完全に私の性格として、そこが本当に遅かったなっていうふうに思いますね。私が言ってる他者に対しての警戒心や、攻撃してしまうまでの反骨心・反発心は、他の人はたぶんもっともっと早くクリアして、社会に出ると同時に、もしかすると大学にいるうちに、「こんな人もいるんだ」っていうのを面白がれるようなドアが1個開くはずですし、それが得意な人もいっぱいいると思うので。これは私の性格、個性として、他者への興味っていうドアが開くのは一番最後だったっていうだけの話で。それは他の表現者さんや若い方に対して30代までドア開いちゃだめだよって話では全くなくて、むしろ早く開きたまえてっていう感じです。

——ありがたいお言葉ですね。

いや、本当に。これはもう反省点でもあります。

——最後に、藝祭2025に向けて、藝大生に向けて、一言いただきたいです。

藝大生さんは、表現することに情熱を注いでこの大学に来ていると思うので、私よりも表現欲や心の中の火種はずっと強い方々だと思います。むしろ皆さんの灯いたばかりの火、他者を飲み込むぐらいの表現欲を藝祭当日は、私がいただくぐらいの気持ちで伺いたい。私が年上で、音楽一本で食べている人間だ、ということを見下して、それを飲み込むぐらいの表現と一緒に味わえたらと思っています。表現することは大変ですが、手を抜かずにいけば、必ず何かを得られるものだと思います。お互いに苦しみながら、頑張っていきましょう。

——たくさんお話を伺うことができ、本当に良かったです。藝祭当日、特別なステージを藝大生一同、楽しみにしております！